湖東産地見学会

白秋の哀れを思わせるこの頃、少し遅い安土の美しい紅葉の季節。琵琶湖を要する滋賀県の湖東を訪ねました。11月28日（火）にTDA会員の北川陽子氏のご協力により湖東産地見学会、開催の運びに至りました。

湖東地域は古来より麻の産地。近江上布の起源は不詳だが室町時代の文献に文書が現存し、麻布の製織が行われた事が記録されています。また、近江は四方を山々に囲まれ琵琶湖より発する湿気と、鈴鹿より地下数百mを流れる豊富な伏流水が麻の加工・製織に最適であった事が麻布発展の大きな原因のようでした。

今回、麻布に関わる工場4社を見学させて頂きました。

● 中藤織物整理工場

伝統ある近江ちぢみの手揉み仕上加工が得意。大手の出来ない手法、風合い、丁寧さを大事にされている。奈良晒や能登上布の産地の整理仕上げもここでされている程、麻の仕上げにおいては定評がある。

● （株）おおまえ

ビスコース加工（擬麻ビス加工糸）、柿渋染め、ほぐし染織を得意とされ、その他漆染め、一本糊付け加工（カンピョウ状の糸）、水撚り麻（毛羽が出ない）など、素材である糸・染め・織りの各工程に於いて、特殊技法と自然味のある商品作りを目指されている。畑の真中にある柿渋染めの現場は圧巻でした。

● 山西整経

湖東産地の特徴である先染め織物に整経の技術は欠かせない繊細な縞割りから大柄まで対応されている。また、近江上布が織られていた古い手機・機料品を収集、修復され次代に残す為の工夫をされている。二代目は、近江上布の技術習得にも努力されている。カンピョウ・昆布・クラゲを使った食べられる織物を作られジャパンクリエーションで入選されました。

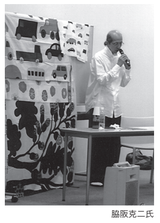
● 北川織物工場

染め・絣の手法が得意とされ、この産地でしか出来ない物づくりを追求され、その姿勢を次代に伝えるため若い力との取り組みに力を入れている。また以前されていた、ほぐし織の復活も考えられており、生地作りから縫製・製品販売まで一貫した物づくりを目指されている。

参加者　TDA会員10名、準会員1名、一般1名　　計12名

（ 野々口　悟）

異業種交流セミナー「日本製〜日本性」



脇阪克二氏

岩高要子氏

会場風景

6月23日、宝塚造形芸術大学大学院梅田サテライトにて、講師に元マリメッコデザイナーで京都造形芸術大学客員教授の脇阪克二氏と、バイヤー、コンサルタントで（有）マトッティ専務取締役である岩高要子氏を迎え、約80名の参加者で行われた。MADE IN JAPANの価値や意味が見直され始めた昨今、テーマである「日本製〜日本性」についていわゆる'川上'と'川下'と立場の違う両氏が予定時間では納まりきらないほど多くの経験と情報をお話下さり、興味深く内容の濃いセミナーであった。

脇坂氏は、1968年からフィンランドのマリメッコ社で8年間、その後ニューヨークのジャック・レノア・ラーセン社を経て、現在は京都にショップを置く「SOU-SOU」でデザインを手掛けられている。同時に大学において若手育成の教育にも携われている。過去から現在に至るまでの彼のデザインの原点は「BE YOUR SELF（自分自身であれ）」ということである。それはフィンランド時代においては単に'自分自身'を表現することだったのが、現在の「SOU-SOU」の商品では'日本'という個性の表現に至っているように思う。「作られた文化のある所でそのものの作りをするのが良い。日本にしかなくて、日本で必要とされているもの、つまり味噌・醤油のようなものを作っていきたい」と語る。

一方、著書「セレクトバイヤーへの道」の大ヒットから「カリスマバイヤー'岩高マジック'」と呼ばれる岩高氏は、アパレルメーカーのニットバイヤーから販売員、販売代行を経て（有）マトッティ設立、現在神戸にドレスを始めとするインポート商品のセレクトショップを4店舗展開されている。海外ではマダムに焦点を当てての商品作りに対し、日本はヤングファッション主流であることなど、洋服の歴史が浅いゆえの特徴を'日本の個性'ととらえて現状に満足しないで自分・日本らしい、自分・日本にしかない感性を開花させることが重要である—それが日本性であると語った。

両氏が共通して語られた「日本人に欠けたプロデューサー的な性質」を巧く補うことが日本性の開花に繋がる。それは商品開発におけるプロデュースであり、顧客一人一人のスタイリストとして着こなしテクニックを売るショップの役割でもある。また、産地の風土や名所、食を楽しみながら商談が決まっていくヨーロッパの展示会に比べ、日本での作られた会場のみでの展示会では海外からのバイヤーとの商談がまとまりにくい現実があり、最近では直接産地に日本製（性）を求め商談に行くブランドも数多く出現しているとのことである。今回のセミナーでは、受講者がそれぞれの立場で「日本製・日本性」を考える貴重な機会になったことと思う。

（辻　めぐみ）